

Jリーグクラブ・ユース指導者と高等学校サッカー部指導者との指導哲学の比較

The study of J-league club youth coache's philosophy

-Through comparison with the case of high school soccer club coache's philosophy -

古賀康彦¹⁾, 堀野博幸²⁾

¹⁾東京都立石神井高等学校

²⁾早稲田大学スポーツ科学学術院

キーワード: 質的研究, コーチング・メンタルモデル, 高等学校サッカー部, Jリーグ・ユース

Key Words: qualitative research, coaching mental model, high school soccer club,

J-league club youth

抄 録

本研究は, 2002 年から 2010 年までで, Jリーガー輩出人数上位者であるJリーグ・ユースと高等学校サッカー部各 4 名の指導者を対象に, コーチング・メンタルモデルを構築しその差異を比較することを目的とした. 8 名の研究対象者に対し, 1 対 1 の半構造的, 深層的インタビュー調査を実施した. データ分析に関しては, Cote et al.(1993) による質的データ分析法を一部改変し行った. その結果, 最も抽象度の高い大カテゴリーにおいて, すべての指導者に「人間力の向上」「プレーのパフォーマンス向上」「指導者の姿勢」が共通していた. 特異性としては, 「良い指導者の輩出」が挙げられた. Jリーグ・ユース指導者においては, 「プロ選手の育成」が共通していた. Jリーガー時代の経験とトップチームの存在により「プロ選手の育成」という目標を現実的に捉えることができると考えられる. 一方, 高等学校サッカー部指導者においては, 「世界を意識した個の育成」が共通していた. 同一チームでの長期に渡る指導を通じ, 代表選手となった教え子の存在により世界を意識し始めたと考えられる. Jリーガーを多く輩出している指導者の指導哲学を知ることによって指導者養成の一助となる可能性が示唆された.

スポーツ科学研究, 10, 173-182, 2013 年, 受付日: 2013 年 2 月 11 日, 受理日: 2013 年 9 月 9 日

連絡先: 古賀康彦 〒202-0021 東京都西東京市東伏見 2-7-5 体育教室棟 205

E-mail: y.k.0403@hotmail.co.jp

I. 背景

北村ら(2005)は, 「どのような知識・信念・哲学・価値観に基づいて, 研究対象者が指導行動を生起しているのかについて深く掘り下げた質的な情報が重要となる」と述べており, 対象者の内面性に関しての調査に際し, 質的な研究方法が適していることを示唆している.

本研究において, 指導者の内面性及び指導哲学を明らかにすることを第一の目的とし, 指導哲

学とは, Sherman&Webb(1998)が指摘するように, 「『生きられた』『感じられた』『被った』経験との直接的なかわりを含むもの」であることから, 質的研究が適している.

また, 北村ら(2005)は高等学校サッカー部で監督として選手の指導にあたっている8名の指導者を対象に, 指導者の指導行動がどのような知識・信念・哲学・価値観にもとづいて生起しているのか

について明らかにし、コーチング・メンタルモデルを構築した。コーチング・メンタルモデルについて北村ら(2005)は、「こうした状況を捉え行動を決定する枠組みは“メンタルモデル”によって説明することが可能である」と述べているように、指導者が現場での様々な事象を捉え、指導行動を決定する枠組みを明らかにする研究として、近年日本でも質的な研究方法を用いたメンタルモデルの研究が行われてきた。一方で、Jリーグの第2種の研究には、加藤ら(2006)の研究がある。加藤ら(2006)はJリーグに所属するAチームの下部組織のユースチームを対象として、サッカーのコーチングを2002年3月20日から2004年12月31日まで実施した記録を基に、試合から抽出した課題、トレーニングの構築及び実践、トレーニング効果をまとめた。また、それらを日本サッカー協会作成の指導指針と比較し、コーチングの実践を考察した。

II. 研究目的

加藤ら(2006)の研究では、Jリーグ・ユースチームにおけるトレーニングの構築や実践、トレーニング効果について述べられているが、Jリーグ・ユース指導者の指導に対する考え方は明らかにされておらず、Jリーグ・ユース指導者のコーチング・メンタルモデル構築には至っていない。

一方、北村ら(2005)の研究の中で示されたコーチング・メンタルモデルは、「熟達化」、「意識化」及び「支援」の3つのカテゴリーから構成されていた。しかし、このコーチング・メンタルモデルはエキスパート高等学校サッカー指導者に限ったメンタルモデルなのかという点についての検討は不十分である。さらに、これまでのコーチング・メンタルモデルの研究では、全国レベルや国際レベルの大会で優れた成績を収めた選手やチームの指導者を対象にしたものが多く、Jリーグ・ユースチームの選手や指導者を対象にしたものは見当たらない。

そこで、本研究では、Jリーグ・ユース指導者がどのような考えに基づき指導を行っているのか、その指導哲学を明らかにすることを前提とし、コーチン

グ・メンタルモデルを構築することを目的とする。

また、Jリーグ・ユース指導者と並行して、対象となるJリーグ・ユース指導者と同年代であり、Jリーガー輩出上位の高等学校サッカー部指導者のコーチング・メンタルモデルを構築し、その差異を検討する。

III. 方法

1. 対象者

本研究では、Jリーグ・ユース、高等学校サッカー部ともに、Jリーガー輩出上位である指導者を対象とした。

Jリーグ・ユース指導者の対象者の選定条件として3点を設定した。その際、事前に、Jリーグのホームページなどをもとに、Jリーグ開幕(1993年)以降、Jリーガーを多く輩出しているクラブと指導者を輩出人数の多い順に並べ、Jリーガーの輩出人数を集計した。

- (1) Jリーガーを20名以上輩出しているチームより抽出する。
- (2) 2002年以降、2010年度までで、Jリーガー輩出ランキング上位者である。
- (3) 2002年以降、2010年度までで、3年以上継続して指導した実績がある。

ここで、(1)と(2)を選定条件にした理由として、Jリーグにおける「アカデミー」の目的を挙げる。Jリーグは選手育成システムとして、「Jリーグアカデミー」を設置している。アカデミーに関しては、「Jクラブは、プロとして通用する選手を一人でも多く輩出するために1種(トップ・サテライトチーム)だけではなく、2種(ユースチーム)、3種(ジュニアユースチーム)、4種(ジュニアチームやスクール、クリニック)の育成年代の組織であるJリーグアカデミーを持つことが義務づけられています(Jリーグ公式サイト, 2011)」と記載されているように、「プロ選手の輩出」を目的としている。本研究においては、「プロ選手の輩出」を目標に掲げているJリーグにおいて、Jリーガーを多く輩出しているチームと指導者を重要視し、選定条件とした。

また、(2)における「2002年以降」を選定条件にした理由として、「Jリーグアカデミー」が2002年にスタートした(Jリーグ公式サイト, 2011)ことを挙げる。さらに、異動や前任者の影響を考え、(3)の条件を追加した。

高等学校サッカー部指導者の対象者の選定条件として2点を設定した。前提として、Jリーグ開幕(1993年)以降、Jリーガーを多く輩出している高等学校と指導者を輩出人数の多い順に並べた。輩出人数はJリーグのホームページや選手名鑑を参考に、研究者が集計した。

- (1) 2002年以降、2010年度までで、Jリーガー輩出ランキング上位者である。
- (2) ランキング上位者のうち、Jリーグ・ユース指導者の年齢(40代前半～50代前半)に該当する指導者である。

ここで、(1)を選定条件にした理由としては、Jリーグ・ユース指導者との条件をできる限り一致させ、比較を円滑に行えるようにしたためである。また指導者の年代に大きな差がでると、コーチング・メンタルモデルの比較が困難になることが予想されたため、(2)の条件を追加した。

これらの選定条件により、本研究では、選定したJリーグ・ユース指導者6名のうち4名のインタビューに、また、高等学校サッカー部指導者6名のうち4名のインタビューに成功した。

2. データ収集方法

本研究がコーチングの主体としての対象者自身の認識を重視するため、個別性の高い広範囲な回答が得られることが重要であることから、調査は1対1の半構造的(semi-structured)、深層的(in-depth)、自由回答的(open-ended)インタビューにより実施した。インタビューは指導者が指導をしている施設内で行い、平均時間は約60分であった。インタビューに先立ち、北村ら(2005)の先行研究を参考に、①対象者の体験や認識について幅広く回答が得られるような基幹的質問(main question)、②語られたテーマ、意味、

考え等についてその意味をより明確にさせる追跡的質問(follow-up question)、③語られた内容に的を絞って更に深く掘り下げる探索的質問(probes)、の3種類を組み合わせたインタビュー・ガイドを作成し、予備実験を繰り返しながら質問項目や質問順序の精査とインタビューの練習を行った。

インタビューに用いた質問項目は、研究の目的に沿った対象者の体験や認識について幅広く回答が得られるように基幹的質問として以下の3つを設けた。

- (1) ユース(高校)年代では何を大切にしながら育成に携わっていますか？
- (2) どんな選手を育てたいと思いながら指導されていますか？
- (3) 選手を育てるために、どのような知識を生かしながら指導されていますか？

また、追跡的質問、探索的質問は以下の通りである。

追跡的質問:例)

- ・ そのお考えに至ったきっかけは何かございますか？
- ・ 個性を伸ばすために具体的にどういったことを伝えられていますか？

探索的質問:例)

- ・ なぜ、戦術が重要だとお考えですか？
- ・ なぜ、人間性を重要視されているのですか？

対象者には、インタビューの概要を理解してもらうため、予め基幹的な質問項目を提示した。インタビュー当日は、原則としてインタビューガイドの質問項目に沿いつつ、インタビューの流れに応じて指導者の指導哲学を具体的、深層的に明らかにするため柔軟に変化させながらインタビューを行った。インタビューは、研究者自身が行い、インタビュー内容は対象者の承諾を得た上で、音声はICレコーダーに録音した。

3. データ分析

IC レコーダーにて録音し得られたそれぞれの対象者に対するインタビューデータは、直ちにテキスト化(トランスクリプト)された後、次の3つのステップにより質的分析が行われた。

なお、本研究におけるデータ分析は、Côté et al.(1993)による質的データ分析法を参考にし、一部改変し行われた。

本研究では、指導者間の共通性、特異性、を調査するため、3段階目のサブカテゴリーと最終カテゴリーの間に新たにカテゴリーを設けることで、より深くカテゴリー間の共通性と特異性に関して分析することを試みた。また、分析過程の最終段階の名前を「大カテゴリー」に改めた。そのため、本研究では、4つのステップが存在する。

1) 標題作成

テキスト化されたインタビューデータを、ひとつ以上の概念あるいは見解を含む意味単位(meaning unit)に分け、意味単位ごとに表題がつけられた。

2) サブカテゴリー作成

すべての標題を比較し、類似した意味を持つ標題で、共通の上位概念に括られるサブカテゴリーへ再編成し、それぞれのサブカテゴリーに標題をつけた。

3) カテゴリー作成

類似している内容を持つサブカテゴリーを共通の上位概念で括り、再編成してカテゴリーとして標題を付けた。

4) カテゴリー概念化(大カテゴリー)

カテゴリーを、より広く抽象度の高いレベルの大カテゴリーへと統合した。統合した大カテゴリーに対して、指導哲学に関する大カテゴリー間の関係性が、新たに見出せなくなるまで検討を行った。

4. 信頼性検証

信頼性の検証は、Culver et al. (2003)を参考に2つの方法を用いた。

1) 研究方法の明示

インタビューの方法や手順、データ分析方法を可

能な限り明らかにし、どのような過程で研究が行われたのかを明示する。

2) 研究者による点検

Côté et al. (1993)による質的データ分析法に基づき、質的研究法の経験を2年以上有する4名の研究者により点検を行われ、完全な合意が得られるまでカテゴリーの再編成が繰り返し行われた。また、研究者のバイアスを考慮し、研究者の考え方や世界観や理論的方向性を、調査の初期段階で明確にした。

III. 結果

1. 分析過程

分析されたデータは前述の4つのステップにより、最終的に大カテゴリーにまとめられた。本研究では、指導哲学の共通性、特異性の観点から分析を行った。そのため、抽象度の高い大カテゴリーとカテゴリーにおいて、すべての指導者のデータを検証し、統合されたカテゴリー同士の意味合いが近いものに同じ標題をつけることで、共通性と特異性を抽出した。

また、分析過程をより明確にするため、大カテゴリーとカテゴリーにおいて、指導者間で共通するカテゴリーのセルに色づけをした。色づけの作業により、色がついていないセルを指導哲学の特異性と位置づける。

例) 大カテゴリー「人間力の向上」: 青色

例) カテゴリー「ストロングポイントを作る」: 黄色

例) 「規律を守る」: 白色: 特異性

並びに、コーチング・メンタルモデルを結果の最後に記載した。メンタルモデルは確認の取れなかった指導者A、指導者Rを除き、重みづけが行われている。重みづけが行われた箇所と指導哲学の特異性には黄色で色をつけた。また、Jリーグ・ユース指導者、高等学校サッカー部指導者それぞれの共通モデルの差異についても同じく黄色で色をつけた。

の向上」が共通しており, 特異性として「世界を意識した個の育成」が挙げられた. 対象者の中で唯一異なる形のコーチング・メンタルモデルになった

のは指導者 X であった. 指導者 X は, 指導の目標に「良い指導者の輩出」を掲げていた.

3. Jリーグ・ユース共通モデル

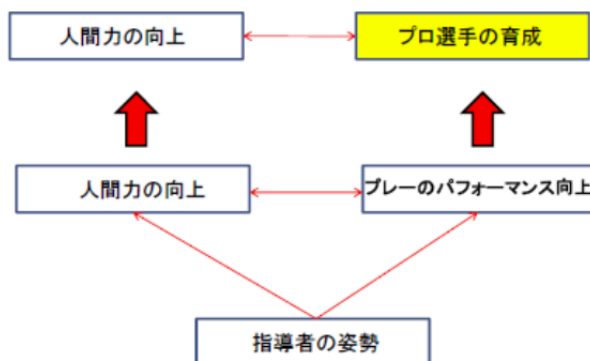


図1 Jリーグ・ユース指導者 共通モデル

4. 高等学校サッカー部指導者共通モデル

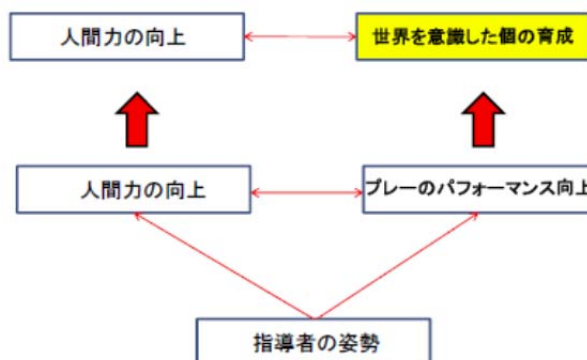


図2 高等学校サッカー部指導者 共通モデル

5. 高等学校サッカー部指導者 X

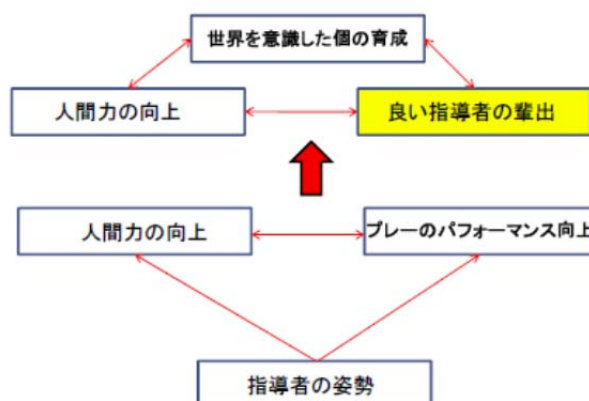


図3 指導者Xの指導哲学に関するコーチング・メンタルモデル

IV. 考察

結果より、最も抽象度の高い大カテゴリーにおいて、Jリーグ・ユース、高等学校サッカー部共に、すべての指導者に「人間力の向上」「プレーのパフォーマンス向上」「指導者の姿勢」の指導哲学が共通していた。特異性としては、指導者 X が「良い指導者の輩出」を掲げていることが挙げられる。

大カテゴリーについて、図 1 と図 2 のコーチング・メンタルモデルをもとに Jリーグ・ユース指導者と高等学校サッカー部指導者の両者を比較すると、大カテゴリーにおける、「プロ選手の育成」と「世界を意識した個の育成」に違いがあることが挙げられる。

すべての Jリーグ・ユース指導者の大カテゴリーが「プロ選手の育成」になった理由については、「キャリア」が影響していると考えられる。Jリーグ・ユース指導者は 4 名中 3 名が元 Jリーガーである。Jリーガーとしての経験があることで、プロの世界の状況を深く把握していることから、「プロ選手を育成する」という目標を現実的に捉えることができ、且つ、プロ選手を育成するための道筋を立てることができると考えられる。ただし、元 Jリーガーではない指導者 C も含めた Jリーグ・ユース指導者たちは、いずれも 93 年 Jリーグ開幕以前は、社会人プレーヤーだったという背景がある。そこで、本来であれば、Jリーグの下部組織から直接 Jリーガーになり、引退後に指導者になった人との比較検討が必要である。しかし、本研究の対象者選定の諸条件に見合う指導者がいないため、今後の研究課題とする。

並びに、Jリーグには「トップチーム」が存在することも理由として挙げられる。序論でも述べたように、Jリーグにはアカデミーが存在し、トップチームへの育成を理念に掲げている。Jリーグ・アカデミーの存在意義からも、アカデミーがトップチームに選手を輩出することは必然であり、Jリーグ・ユース

指導者は、まずは自身が所属するクラブへ選手を輩出することを目標に掲げていると考えられる。以上のことから、Jリーグ・ユース指導者は、指導者自身のプレーヤーとしての経験やクラブの組織や Jリーグ・アカデミーの方針を鑑みたうえで、トップチームの輩出を第一目標としていると考察できる。

次に、高等学校サッカー部指導者について考える。すべての高等学校サッカー部指導者の大カテゴリーが「世界を意識した個の育成」になった理由については、「同一チームでの指導」が考えられる。本研究で調べたところによると、Jリーグはトップチームの方針によって異動が多いことや、成果があげられなければ解雇されることもあり、93 年の開幕以降、5 年以上継続して同じチームで指導したユース指導者が全体で 6 名である。しかし、教員という立場は、都道府県や学校単位の規定による異動はあるものの、比較的長期に渡り同じチームで指導ができることが特徴である。また、歴史的に見ても、高校サッカーは Jリーグが組織される以前からユース年代の育成の中心的役割を担っていた。黒田 (2008) も「日本のユース年代の育成をリードしてきた高校サッカーであり、冬の高校選手権大会は全国のサッカー少年にとって憧れであった」と述べている。そのため、本研究で対象となる、高等学校サッカー部指導者は、Jリーグ・ユース指導者よりも以前から日本代表選手を輩出していた経緯がある。そのことから、卒業生に日本代表選手となった OB を持つ高等学校サッカー部指導者は多く、指導者 Y が、「みんな戻ってくるっていうか、卒業しても、大学行っても、プロ行っても、顔出すからね」と述べていたように、同一チームで長期に渡り指導することで、日本代表選手の育成過程を熟知し、戻ってきた OB に海外の情報を聞くことや、代表選手として闘う教え子を見ることで、「世界」を意識しはじめることにつながったと考えられる。

また, Jリーグ・ユース指導者, 高等学校サッカー一部指導者共に対象者の全員が「人間力の向上」を重要視していたことが興味深い。これまで, 高等学校サッカー一部指導者は「人間性の教育」を重要視し, 一部のクラブを除いて, 多くのJクラブは, 物理的な要因などから「人間性の教育」をすることが困難であるという指摘がなされてきた。

例えば, 古沼(2006)は, 「生きるということの基本姿勢を守ることがチームスポーツであるサッカーにも大いにつながっています」と述べている。黒田(2008)は, 「高校世代にとって必要なのは, 人間教育である。これからの人生を生きていくための基礎を固める時期なのだ。人としての基本を身につけさせないで, どうして選手が育つというのか」と寝などに関する指導の重要性を説く一方で, 「クラブチームが抱えている問題は, 教育との兼ね合いの難しさだろう」と述べている。

このように, 高等学校サッカー一部指導者の多くが「人間性の教育」の重要性を示唆する一方で, 「高校とJクラブでは, 指導者と子どもたちの関わり方が大きく異なるのです(本田, 2009)」とJクラブの「人間性の指導の少なさ」を危惧している考えが多く見受けられる。

しかし, 結果からもわかるように, すべてのJリーグ・ユース指導者は「人間力の向上」を重要視している。また, 指導者 A が, 「クラブにも, 基本的なところ, そういう人間形成の部分っていう, こうしようとか」と述べていたことや, 指導者 B が, 「クラブとして, 目標として, ユースの選手に対して目標にしているところに, 人間として, しっかり自立していける人間を育てていくということ」と述べていることから, クラブのフィロソフィーとして「人間性の教育」に力を入れているチームが多いことがわかる。Jリーグでも, 「Jリーグ, そして日本サッカーの発展は, 『個』の育成, 人間的な成長なくしては考えられません。選手としてのレベルアップはもちろん, 人間としての成長に配慮することも, Jリーグ

の重視する取り組みの一つです。」と述べており, 人間性の教育を重要視している。具体的な取り組みとしては, 指導者 C が, 「学校とのコミュニケーションを必ず俺たちが取る」と学校訪問をすることや, 指導者 A が, 合宿などを通じて選手の人間性を教育することを挙げている。クラブ単位では, 全寮制にして人間性を教育するチームもある。

このことから, 多くの高等学校サッカー一部指導者が指摘するように, Jリーグ・ユース指導者と高等学校サッカー一部指導者との指導哲学の差異になると考えられていた「人間性の教育」や「人間力の向上」は, 現在Jリーグの組織やクラブも含め, 多くのJリーグ・ユース指導者が「人間性の教育」や「人間力の向上」に力を入れているため, 「人間性の教育」の категорияや「人間力の向上」の大categoryが高等学校サッカー一部指導者の指導哲学の特異性として抽出できなかつたと指摘できる。

V. 結論

本研究ではコーチング・メンタルモデルを構築することを最終目的とし, Jリーグ・ユース指導者, 高等学校サッカー一部指導者それぞれのモデルを構築することで目標は達成されたが, それらに大きな差異はなかつた。データを抽象化し, メンタルモデルを構築する方法は, 総体性や共通性は示せるが, 特異性を抽出するには不向きだといえる。前述したように, 指導者の指導行動を捉えるためには, 抽象化した概念ではなく, それぞれのcategoryの質に注目すべきであり, メンタルモデル構築により指導行動を理解することは方法論的限界があるといえる。

引用文献

- Andrew, Bennie, and Donna, O'Connor. (2010) Coaching

- Philosophies:Perceptions from Professional Cricket,Rugby League and Rugby Union Players and Coaches in Australia.International Journal of Sports Science & Coaching Volume 5.Number2: 309-320
- アンセルム・ストラウス, ジュリエット・コービン著, 操華子, 森岡崇訳 (1999), 質的研究の基礎. 医学書院:東京, p20, p21
 - Christine,S.,Nash,John,Sproule.,and Peter,Horton.(2008)Sport Coaches ' Perceived Role Frame and Philosophies.International Journal of Sports Science & Coaching Volume3.number4 : 539-554.
 - Côté ,J. ,Salmela,J. ,Trudel ,P. ,Baria,A. ,and Russel l ,S. (1995) The coaching model :A grounded assessment of expert gymnastic coaches ' knowledge .Journal of Sport and Exercise Psychology (17) :1-17.
 - C. ウィリッグ著, 上淵寿, 大家まゆみ, 小松孝至共訳 (2003) 心理
 - 学のための質的研究法入門, 培風館:東京, p46
 - ジェラルド・ウリエ, ジャック・クルボアジェ, 小野剛, 今井純子訳 (2000), 大修館書店:東京, 23-39
 - 本田裕一郎 (2009), 高校サッカー勝利学, 株式会社カンゼン:東京, p230, p231
 - イベチャ・オシム(2007)日本人よ! 長束恭行訳. 新潮社:東京, p52, p130, p131
 - J リーグ公式サイト . <http://www.j-league.or.jp/100year/academy/>. (2011/11/19)
 - ジョアン・サルバンス(2009)史上最強バルセロナ世界最高の育成メソッド, 小学館 101 新書:東京, p23-35
 - 加藤篤 (2010) 競技レベルの違いとコーチング・メンタルモデル—X 県内高校サッカー指導者の事例研究—早稲田大学大学院スポーツ科学研究科修士論文
 - 加藤譲, 流郷吐夢 (2006), Jリーグ下部組織ユースチームにおけるコーチングの実践, 東海大学紀要体育学部:39-48
 - 河野一郎, 勝田隆 (2002) 知的コーチングのすすめ. 大修館書店:東京, p24, p25
 - 北村勝朗・永山貴洋・齊藤茂 (2005) 優れた指導者はいかにして選手とチームのパフォーマンスを高めるのか? 質的研究によるエキスパート高等学校サッカー指導者のコーチング・メンタルモデルの構築. スポーツ心理学研究 (32) :17-28.
 - 広辞苑・第六版 (2011) 岩波書店:東京
 - 古沼貞雄 (2006) 古沼貞雄情熱 元川悦子著. 学習研究社:東京, p50
 - 呉宣児 (2005) 動きながら識る, 関わりながら考える. 伊藤哲司ほか編. ナカニシヤ出版:京都, pp.78 - 80
 - 黒田和生 (2008) トモニイコウ. アートヴィレッジ:東京, p.3, p.4, p20, p25
 - 村松尚登 (2009) テクニックはあるが, 「サッカー」が下手な日本人. ランダムハウス講談社:東京, p116
 - 能智正博 (2005) 動きながら識る, 関わりながら考える. 伊藤哲司ほか編. ナカニシヤ出版:京都, p120.
 - 大森雄一朗 (2010) 高校選手権優勝, 日本代表選手育成経験がある高校サッカー指導者の人間形成に関する質的研究. 早稲田大学大学院スポーツ科学研究科修士論文
 - 小澤一郎 (2010) スペインサッカーの真髓. 白夜書房:東京, p8
 - S・B・メリアム著, 堀薫夫, 久保真人, 成島美弥訳 (2004) 質的調査法入門. ミルヴァ書房:

- 京都, p8, p9, p105, p106, p107, p108
- ・ 俵尚申 (2001) コーチングにおける動機づけについての一考察. 嘉悦大学研究論集第 44 巻第 1 号通巻 80 号:81-91
 - ・ 上向貫志・飯田義明 (2007) Jリーグユース選手におけるキャリアの志向性に関する研究—職業的アイデンティティからの検討—. 武蔵大学人文学会雑誌 第 40 巻第 3 号:55-62.
 - ・ ウヴェ・フリック (2002) 質的研究入門 < 人間の科学 > のための方法論. 春秋社: 東京, p.119
 - ・ 湯浅健二 (2004) サッカー監督という仕事. 新潮文庫: 東京, p17, p18
 - ・ 各チーム公式サイト (2011/6/16)
鹿島アントラーズ
http://www.so-net.ne.jp/antlers/clubs/top_layers
ベガルタ仙台 <http://www.vegalta.co.jp/>
浦和レッズ <http://www.urawa-reds.co.jp/>
大宮アルディージャ <http://www.ardija.co.jp/>
柏レイソル <http://www.reysol.co.jp/>
FC 東京 <http://www.fctokyo.co.jp/>
川崎フロンターレ <http://www.frontale.co.jp/>
横浜F・マリノス <http://www.f-marinos.com/>
アルビレックス新潟 <http://www.albirex.co.jp/>
清水エスパルス <http://www.s-pulse.co.jp/>
ジュビロ磐田 <http://www.jubilo-iwata.co.jp/>
名古屋グランパス
<http://nagoya-grampus.jp/>
ガンバ大阪 <http://www.gamba-osaka.net/>
セレッソ大阪 <http://www.cerezo.co.jp/>
- ヴィッセル神戸
<http://www.vissel-kobe.co.jp/>
サンフレッチェ広島
<http://www.sanfrecce.co.jp/>
モンテディオ山形
<http://www.montedio.or.jp/>
ヴァンフォーレ甲府
<http://www.ventforet.co.jp/>
アビスパ福岡 <http://www.avispa.co.jp/>
サガン鳥栖 <http://www.sagantosu.jp/>
水戸ホーリーホック
<http://www.mito-hollyhock.net/>
栃木 SC <http://www.tochigisc.jp/>
ザスパ草津 <http://www.thespa.co.jp/>
ジェフユナイテッド千葉
<http://www.so-net.ne.jp/JEFUNITED/>
東京ヴェルディ <http://www.verdy.co.jp/>
横浜 FC <http://www.yokohamafc.com/>
湘単ベルマーレ <http://www.bellmare.co.jp/>
カタレ富山 <http://www.kataller.co.jp/>
FC岐阜 <http://www.fc-gifu.com/>
京都サンガF.C. <http://www.sanga-fc.jp/>
ガイナレ鳥取 <http://www.gainare.co.jp/>
ファジアーノ岡山
<http://www.fagiano-okayama.com/>
徳島ヴォルティス <http://www.vortis.jp/>
愛媛FC <http://www.ehimefc.com/>
コンサドーレ札幌
<http://www.consadole-sapporo.jp/>
ギラヴァンツ北九州 <http://www.giravanz.jp/>
ロアッソ熊本 <http://roasso-k.com/>
大分トリニータ <http://www.oita-trinita.co.jp/>